

子ども同士が認め合える学級づくり

～学習規律に基づく協働的な学習を通して～



なぜ、その研究主題を選んだの？

これからの社会を生きる子どもたちに必要な力として、以下の2点が言われている。

- ・あらゆる他者を価値のある存在として尊重する力。
- ・多様な人々と協働しながらさまざまな社会的変化を乗り越える力。

学校教育目標においても、以下のことが盛り込まれている。

- ・豊かな人間性とたくましく生きぬく力を身につける子どもの育成

本校の目指す児童像としても

☆心豊かで思いやりのある子ども

- ・互いの良さを認め合い、他との関わりの中で自分を高めていける子ども
- ・友だちを思いやる心をもつ子ども
- ・相手の立場や人の気持ちを考えて、行動し協力できる子ども

以上のことから、他者を尊重し、お互いに認め合う雰囲気学級の中につくっていくことや、それを通してお互いに認め合える子どもを育てていくことは、本校において最も必要性のあるテーマと考えられる。よって、研究主題を【子ども同士が認め合える学級づくり】と設定した。

学級づくりにおいて、「他者を尊重し、お互いの存在を認め合えること」は、とても大切であり、必要なことであると考えられる。本校の子どもの実態として、友達に優しく接したり、一緒に作業することを好んだりなど、他者と協力・協働する姿を見ることができる。しかし反面、自分の考えを主張しようとするあまり、他者の考えを受け入れることができなったり、特別な理由もなく他者と距離をとり分かり合おうとしなかったりなど、「認め合い」「他者尊重」という点で課題となる行動も見られる。

今までの学校現場では、「学級づくり」は学習指導以外の生活指導の時間が中心となり、学習指導は学力を身につける時間として位置づけられているように思える。子どもたちが学校にいる時間の大半は授業の時間であり、生活指導とともに、学習指導の中で学級づくりにつながる学級経営の工夫ができれば、より認め合える学級がつくれるのではないかと考える。その考えから、副主題を《～学習規律に基づく協働的な学習を通して～》と設定した。そして、生活指導と学習指導を往還関係として一体と考え取り組みを進めることが大切になるという思いから、以下のような研究仮説を立てた。

【研究仮説】

『よりよい学級づくりへの生活指導や取り組みに合わせて、「聴く」ことを中心とした学習規律に基づく協働的な学習を、授業改善・授業実践に取り入れることで、より子ども同士が認め合える学級がつくられるのではないか。』



学級づくりを、どう捉えているの？

「子ども同士が認め合える学級」をつくっていくためには、学級経営の充実が欠かせない。学級づくりの中心的な要素として、以下の3つであると捉えている。

- ① クラス・児童の実態把握
- ② 教師と児童の信頼関係の構築
- ③ 児童同士の人間関係の充実・深化

上記の①「実態把握」は、②や③と密接に関わっていて、必要不可欠なことである。子どもとの会話や教師からの観察を通して行う以外に、子どもへのアンケート調査も参考になっている。以前から行っている「生活アンケート」「Q-U 検査」に加え、今年度は「学級力向上プロジェクト」における「学級力アンケート」を実施している。この学級力アンケートについては、結果を子どもたちに見やすいレーダーチャートの形で提供し、子どもたち自身が協力して自分たちの学級を客観的な指標に基づいて改善しようという、学級づくりに向けた主体性と自己改善的な態度を育てることをねらいとしている。

学級力アンケート ver.2.0

第 () 回 () 月 () 日 名前 ()

◎ このアンケートは、私たちの学級をよりよくするためにみんなが意見を言うためのものです。それぞれの項目の4～1の数字のあとにはまるく、一つずつ○をつけましょう。

4：とてもあてはまる 3：少しあてはまる 2：あまりあてはまらない 1：まったくあてはまらない

目標をやりとげる力

①目標 みんなで決めた目標やめあてに力を合わせて取り組んでいる学級です。 4-3-2-1

②達成 自分たちの学習や生活をよくするための話し合いや活動をしている学級です。 4-3-2-1

③役割 係や当番の活動に責任を持って取り組む学級です。 4-3-2-1

話をきく力

④聞く姿勢 発言している人の話を最後までしっかりと聞いている学級です。 4-3-2-1

⑤つながり 友だちの話を賛成・反対・つけたしと、つながるように発言する学級です。 4-3-2-1

⑥積極性 話し合いの時、考えや意見を進んで出し合う学級です。 4-3-2-1

友だちをきく力

⑦友だちをきく 勉強・運動・そうじ・給食などで、教え合いや助け合いをしている学級です。 4-3-2-1

⑧聞き手 すなおに「ごめんね」と言って、許し合える学級です。 4-3-2-1

⑨感謝 「ありがとう」を伝え合っている学級です。 4-3-2-1

安心を生む力

⑩安心 友だちのよいところやがんばっているところを伝え合っている学級です。 4-3-2-1

⑪尊重 友だちの心を傷つけることを言ったり、からかったりしない学級です。 4-3-2-1

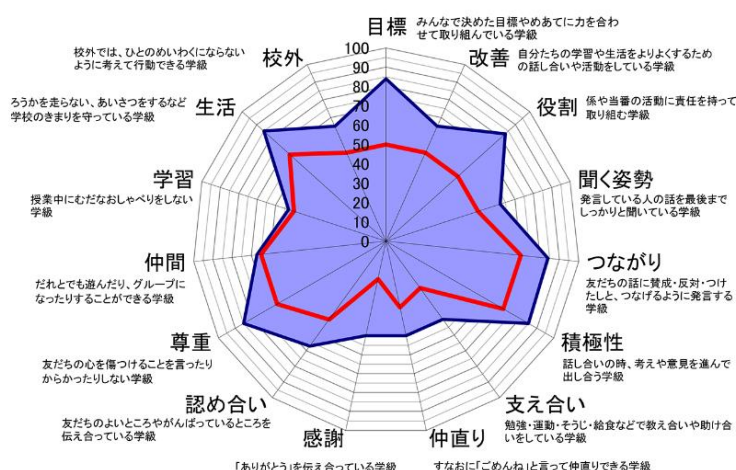
⑫仲直り だれとでも遊んだり、グループになれたりすることができる学級です。 4-3-2-1

きまりを守る力

⑬学習 授業中にむだなおしゃべりをしない学級です。 4-3-2-1

⑭生活 うちかを走らない、あいさつをするなど、学校のきまりを守っている学級です。 4-3-2-1

⑮校外 校外ではひとのめいわくにならないように考えて行動できる学級です。 4-3-2-1



※学級力向上アンケートと、レーダーチャートの例

これらからの実態把握は、「分かってくれている」という子どもの気持ちを経て教師と子どもとの信頼関係につながるだけでなく、子ども同士の間人間関係を深める上でも大切なこととなる。

上記②の「信頼関係の構築」については、学習指導要領総則において「主に集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと、個々の児童の多様な実態を踏まえ、一人一人が抱える課題に個別に対抗した指導を行うカウンセリングの双方により、児童の発達を支援すること」とあるように、クラスや子どもに対して、その時必要な支援や指導を入れていくことが大切となる。褒める・認める・叱る・諭すなどのバランスを考え、時には毅然とした姿勢で子どもと接し、ルールや規則の大切さを考えさせることも必要となる。

上記③の「人間関係の充実・深化」については、今年度の主題である「認め合い」に一番大きく関わることである。生活指導上の工夫として、学級レクや帰りの会での「いいこと見つけ」など、各学級において様々な実践が行われている。しかし、その時間は1日の中でそう多くはなく、学級活動の時間も学級における諸問題の解決に使われることが多い。そこで、学習指導の中で人間関係の充実・深化につながる活動を多く取り入れることが認め合える学級へつながっていくのではないかと考える。



学習指導をどのように進めていくの？

以上の学級づくりの3要素をふまえた学級づくりのために、生活指導と一体として進めていく学習指導の工夫として、以下のA～Dが大切となる。今年度の研究において、最も中心となる内容である。

A 学習規律の定着

まずはしっかりと学習規律を定着させることを、認め合いの第一段階と捉える。そして、その中でも「聴く」「傾聴する」ことを中心に捉える。お互いの話を「聴く」ことは学習規律の、そして認め合いの最初の一步であり、最重要項目でもある。

「聞く」と「聴く」の違いを調べると、『一般的に「聞く」は、「物音を聞く」「話し声が聞こえる」のように、音や声などを自然に耳に入ってくることで、聴くは、「音楽を聴く」「講義を聴く」「国民の声を聴く」のように、積極的に耳を傾けることを表します。』とある。本校の研究では、まさに「聴く」ことのスキルを身につけさせることが大切となる。

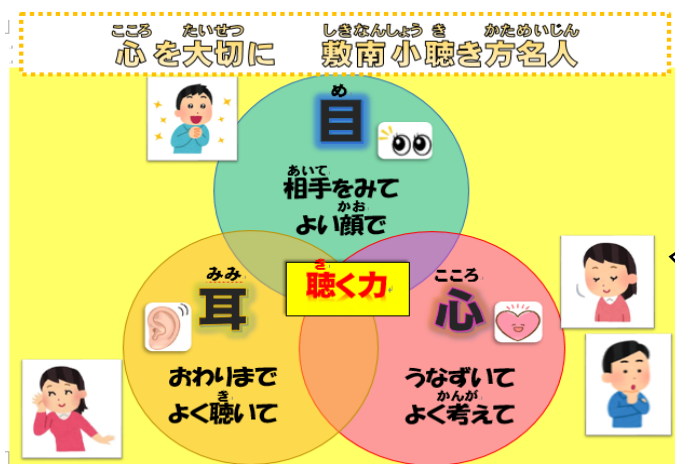
相手の考えを聴くことを定着、発展させるための方策として、以下のことを実践している。

- ・全校でこの先も活用できる目標を作成

本校では「目・耳・心で話を聴こう」という全校共通のめあてを設定した。

- ・その目標を掲示物として可視化・全クラスに配布・掲示してある。

- 一日のうち、朝の会で確認したり、授業終わりや帰りの会に振り返ったりなど、子どもたちが紙を見なくても言えるくらいに身近なものに。
- 学級活動などを通して、それぞれのきまりがなぜ大切かを考えさせる。



全校統一のめあてをつくり、掲示物を教室に貼っています。

B 生活指導と一体となる学習指導

生徒指導提要において、「いわゆる「授業」という形で行われるために、ともすれば学習指導の場というイメージが強く働き、生徒指導との関係が十分に踏まえられないことも少なくありません。しかし、第1章でも触れたとおり、学習指導の目的を達成する上で、また生徒指導の目的を達成し、生徒指導上の諸課題を生まないためにも、教育課程における生徒指導の働きかけが欠かせません。したがって、教育課程の編成や実施にあたっては、学習指導と生徒指導を分けて考えるのではなく、相互に関連付けながら、どうすれば両者の充実を図ることができるのか、学校の教育目標を実現できるのかを探ることが重要になります。」と記述がある。教科の指導と生徒指導を一体化させた授業づくりは、生徒指導の実践上の視点である、自己存在感の感受、共感的な人間関係の育成、自己決定の場の提供、安全・安心な居場所づくりへの配慮を意識したものと捉えられる。

生徒指導（生活指導）と一体化させる授業づくりのために

- 自己存在感の享受を促進する意識
わかった！できた！自己肯定感をはぐくむ
- 共感的な人間関係を育成する意識
考えについて児童生徒同士がお互いに関心を抱き合う
- 自己決定の場を提供する意識
自ら考え、選択し、決定する。対話や議論の機会を設けたり、協力して調べ学習をする、実験する、発表する、作品を作る、演じるなど
- 安全安心な居場所づくりの配慮への意識
児童生徒の個性が尊重され、安全かつ安心して学習できる

これら4つの意識をもつとは、言い換えれば学習活動に裏のねらいをもちながら授業を進めるということである。知識技能の習得や思考力等の伸長など、観点に基づく学習活動の表のねらいとともに、「この活動は入れることで共感的な人間関係の育成につながるのでは」などの裏のねらいをもっていくことが大切だと考える。

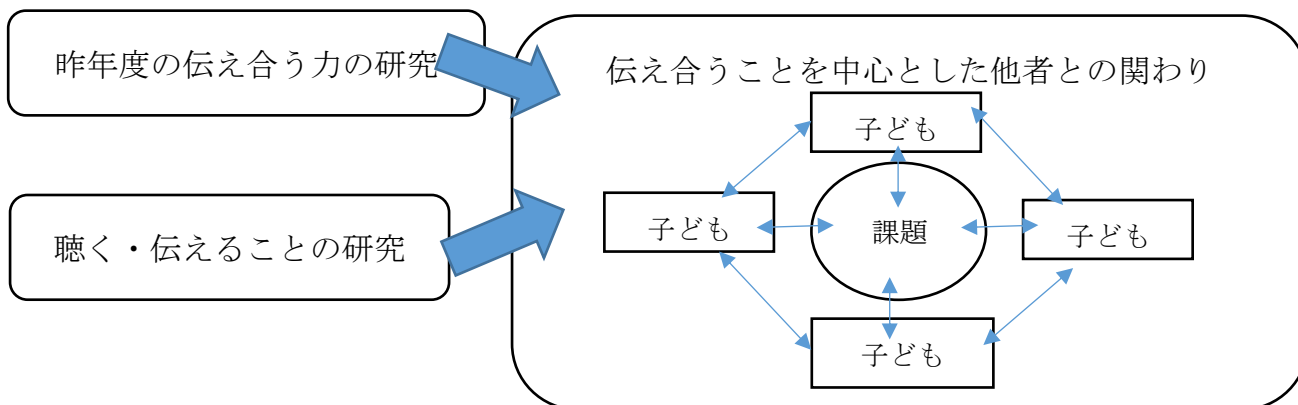
C 協働的な学びの促進

そして、上記の生徒指導との一体となる学習指導を進めるためには、子ども一人ひとりのよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出していくようにする「協働的な学び」を行うことが大切であり必要となる。「話し合おうよ」「みんなで解決しよう」と協働する学びによって互いを認め合い、尊重する関係が育まれ、よりよい学級づくりにつながっていくと考えられる。協働的な学びを手段として活用することで、認め合う意識や態度と力が高まることや、他者尊重のできる学級へと変わっていくことが期待される。

昨年度の「伝え合う力」の研究や、「聴く」ことの充実を考え、

課題の解決のために、伝え合う活動を中心として、子どもが他者と関わる学び

を、協働的な学びと捉えていく。



D 学級づくりに関わる学習内容の選択

よりよい学級について考える時間は、学級活動の時間が中心となる。しかしそれを教科の授業において学習内容として取り扱い、学習を通してよりよい学級について考える機会とすることも有効である。例えば国語科において、「より過ごしやすい学校やクラスのために」というテーマで提案文を書き、お互いの文章について本当に実現可能か話し合う工夫がある。

また、道徳科はねらいとする価値項目によっては、学級づくりにつながる内容で授業を組み立てることができる。特に、「B 主として人との関わりに関すること」「C 主として集団や社会との関わりに関すること」における内容は、教材文を活用しながらも、自分事として考え、学級のためにどう行動していけばよいかを考えるよい機会となる。

以上の、A～Dの「生活指導と一体として進めていく学習指導の工夫」をまとめると、

「聴く」ことにおける規律に基づき、生活指導との一体化の意識をもちながら、必要に応じて学級づくりに関わる内容を取り入れた協働的な学びを授業の中に意識的に活用し、それを習慣化すること

が本校の学習指導における工夫と言える。

また、その学習指導と生活指導とを一体と考え、学級づくりをしていくことが、認め合える学級への道筋であると考ええる。



研究授業を見る視点は？

今回の拡大校内研では、2本の研究授業を実施する。1つは2年生の道徳の授業、もう1つは3年生の総合的な学習の授業である。全教員を2つのチームに分け、単元や主題の選定、教材教具の作成など授業検討を進めてきている。

研究授業の位置づけとしては、学級をつくっている「途中地点」と言える。決してゴールの状態を見せるものではなく、教師と子どもが一生懸命に一つの学級をつくってきていて、「今学級の状態はここまで変わってきている。」「ゆえに、さらなる変化のためにも、このような活動が有効と考え実践してみる。」「まだまだここからである。」という意識である。

2年生の道徳の授業については、上記の学習指導上の工夫のC・Dが特に働いている授業と言える。道徳の学習の中に学級づくりにつながる内容を取り入れ、ペア学習など協働的な学びも活用している。

3年生の総合的な学習の時間の授業については、上記の学習指導上の工夫のB・Cが特に働いている授業と言える。単元全体を通して生活指導との一体化の意識をもち、さらにグループ学習を基本として協働的な学びの活用も行っている。

研究授業を見る上で、教科としての目標だけでなく、認め合える学級づくりにつながっているかを判断していただきたい。